

教職志望者に対する取り組みについて

小池 直彦¹⁾

I 本校教育実践概要と文理学部教職支援プログラムにおける位置づけ

本校では、数学の教師を志望する卒業生に対する支援教育を「教壇に立ったら本物の教師だ」「即戦力となる教師の養成」というコンセプトの下で長年行っている。平日の放課後や土曜日に、お互いに模擬授業を実演し合い、事後にそれについてディスカッションをすることで即戦力を伴う教育実践力を養ってもらおうというものである。文理学部教職支援プログラムでは、学生に対して、採用試験ではもちろん、実際に教師になってから存分に力を発揮してもらうための実践指導が行われていると聞いている。そのコンセプトは上に述べた本校での支援教育のそれと完全に合致するものである。このような事情もあり数年前、文理学部数学科からの「学生実地研修」の要請を、学校として引き受けることにした。それ以来、文理学部数学科3年生を本校に迎え入れ、放課後に全校生徒に対して実施される質問コーナーでの生徒対応を中心に、模擬授業の練習、小テストの採点、授業観察などをしてもらっている。これはボランティアではなく、本人の教職に対する意識、教育実践力を高めてもらう教職支援を主眼とした活動であるため、それぞれの活動に対して、事前に私から注意すべき観点を説明し、事後には専門的見地に基づく細かい指導を行っている。実際の生徒を意識した模擬授業の方法論の指導の他、なぜ生徒はこのような質問をしてくるのか、なぜ多くの生徒が同じ間違いをしてしまうのか、そして、授業担当の先生は生徒たちの授業への集中力が持続するようにどのような工夫をしているのか、などについて細かい解説を行う。ま

た学生たちには事後に必ず「ふりかえりノート」を作成してもらい、その日に学んだことを詳細にまとめてもらうことにしている。それは将来の教育実習、採用試験面接、模擬授業、さらには採用後の数学の授業という場面で大いに役立つと考えるからである。

母校である文理学部の教職志望の学生たちが優れた教育力をもつ数学教師になってくれること、そして、本校での実地研修の取り組みが、文理学部教職支援プログラムの一つである「数学教育実践力養成」という目的に対する一助となることを心から願っている。

II 卒業生に対する教職支援

1. きっかけ

教職志望者に対する支援を始めたきっかけは、私が教師になった理由と密接に関係している。小学校の教師をしていた父、そして、その父に影響されて教師を目指していた兄がいたことが教師という職業を意識するきっかけになったことは当然のことだが、中学2年のときに、「誰のための勉強か」について書かれていた新聞の投書を読み、私の考えが大きく変わった。

「勉強は自分のため」とだけ思っていた私だったが、その投書には「勉強は人のため」と書かれてあった。もちろん、勉強は自分のためではあるが、「勉強をする機会を与えてくれた人のため」、「知識を与えてくれた人のため」でもあり、「勉強したこと、得た知識を人のために活かす」という内容であった。そのときから私は勉強に対する意識を「勉強は人のため」と思うようになり、将来、教師となって勉強したことを教えたいと思う

1) 青山学院横浜英和中学高等学校

ようになった。そして、教師となり「勉強したことを人のために活かす」ことができる立場となった。

この私の意識の変化を生徒に話して聞かせていると、私の授業を受け、私のこのような話を聞く中で、「数学の教師になりたい」という生徒が現れるようになった。その結果、私は「私の後継者を育てたい」という意識をもつようになってきた。こうして、数学の教師を目指す学生の指導をすることになった。

2. どのような思いを持って指導しているのか

私は学校の教師になり20年になる。その前は、学生時代に3年間アルバイトで塾講師をしており、授業研修および実践で授業技術を身につけた。その後、その塾に就職をして5年、授業も行っていたが、学生アルバイトの指導をする立場となった。そのときの経験があったからか、教育実習生に対しても学生アルバイト講師にしてきた指導と同じように「教壇に立ったら本物の教師だ」という、授業に対する意識付けと指導をしてきた。

また、高校卒業時点で大学4年時に教育実習のために戻って来ることを決めている卒業生に対しては、私の学校の数学科は、大学4年の教育実習で指導を始めるのではなく、大学1年から指導を始めている。それは、即戦力となる教師を育成するためである。

一般企業であれば、4月に新入社員として3ヶ月ほどは研修期間があるが、新任教師のほとんどは4月から教壇に立つことになる。わずか3週間の教育実習であり、教壇実習は1,2週間しか経験できない学生が、4月から教壇に立ってよい授業ができるだろうか。それがかなり困難であることは明らかだろう。しかし、よい授業をしてもらわなければ生徒がかわいそうである。だから、私は即戦力となる教師にしたいと思い、数学科の仲間の協力も得て、大学1年時から指導を始めることにしている。

3. 大学3年生までの本校での取り組み

在校中に私が授業で直接担当した生徒が、卒業

後に教育実習生として戻ってくるまでの期間の指導について述べたい。私の学校では定期試験の1週間から10日前の土曜日を使って「数学勉強会」と題した自習形式の試験対策を行っている。少しだけこの目的を述べよう。「いつでも質問に来なさい」とオープンな状態で待っていても、質問に来るには勇気がいるようで、なかなか生徒は来られないようである。また、「授業担当の先生でなくても質問に答えてくれるよ」と言っても、習ったことがない先生には質問しにくいようである。そのような生徒のために「数学勉強会」と題した「質問日」を作ったのである。学年ごとに教室に生徒を集め、教科書や問題集を使って自習をさせる。わからない問題があったら手を挙げて先生を呼ぶ。生徒に対して質問しやすい環境を作っている。数学科の教師は普段担当している学年だけではなく、様々な学年の教室を巡回して、質問を受けていく。こうすることで、多くの先生と接する機会ができ、生徒も普段から担当以外の数学の先生に質問しやすくなる。

この「数学勉強会」を教育実習に来るつもりの子に1年次から積極的に手伝わせている。

1つ目の目的は「生徒と接する機会を増やすこと」である。生徒と接する機会を増やすことで、4年後の教壇実習時に緊張せず授業を行うことができるようにしている。2つ目の目的は授業で生徒の気を引くことのできる「よくある間違い」、「よくある計算ミス」といったネタを得ることである。生徒の質問の多くは「解き方がわからない」、あるいは「何度解いても答えが合わない」というものである。「解き方がわからない」という問題が多くの子に共通しているのであれば、普段の授業で扱えば解けるようになると考えられる。このような問題を多く知ること、授業時に「この問題は質問に来る人が多いから、しっかり聞いておくように!」と授業に活かすことができる。「何度解いても答えが合わない」という生徒がいたら、計算過程を見ることで、どの部分で計算ミスをしているかを知ることができる。これも何人かの生徒に共通しているミスであれば、授業時に「こういう計算ミスをすることが多いから注意しなさい!」と指導に役立てることができる。

数学の教師を目指している学生ならば計算ミスはしたことはあっても、「数学が苦手な生徒の情報がわからない」ということはなかったと思う。この「数学勉強会」を通して、数学が苦手な生徒の情報を集めて、教壇に立ったときに活かして欲しいと考えている。

4. 教育実習期間になるまでの準備

いよいよ教育実習を行う年の春休みには次のようなことを課題としている。5月中旬から教育実習が始まるので、直前の春休みには担当学年はもちろんのこと、大まかに指導する単元がわかっている。他教科の学生の多くは教育実習期間中に教材研究をしているようだが、数学科では、教育実習期間に入るまでに単元全体の内容把握は当然のこと、それだけでなく、中学3年間の単元の流れ、さらに、高校で学習する数学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・A・Bとの関連まで把握しておくように指導している。このような課題を教育実習に来てから言っても時間的には間に合わないであろうし、7月頃からは教員採用試験も始まるので、当然、知識としては持っているべきと考えるからである。

「中学3年間の単元の流れ、高校で学習する数学との関連」が頭に入っていると、教壇実習で「この内容は中1のときに似たことをやったね」「この知識は高2で習う〇〇に関係してくるのだよ」なども言うことができる。教科書にある問題の解説をするだけでなく、説明の中に一言加えるだけで生徒を引きつけることができる。

「教壇に立ったら本物の教師だ」「即戦力となる教師にしたい」という思いからである。

5. 教育実習生のその後

指導教諭として、または、数学科の教師として私が関わってきた実習生のうち5人が現在、私立の中学校、高等学校の教壇に立っている。この5人は教育実習期間前から数学勉強会に参加していたため、期待通りの教壇実習をし、教員採用も早い時期に決まった。1年目から自信を持って教壇に立っていると、勤務先の知り合いの教師からのほめ言葉もいただくことができた。この5人とは就職してからも年に数回顔を合わせ、職場の話や

数学の情報交換を行っている。

Ⅲ 文理学部数学科実地研修

1. 実地研修生の受入について

次に文理学部数学科の学生の実地研修としての受け入れであるが、これは文理学部数学科で学ぶことができた感謝の気持ちからである。そして私の意志を継ぐ教師を文理学部数学科からも出て欲しいとの思いからである。

期間は短いですが、できるだけ即戦力となる教師になるように指導してきたつもりである。数学勉強会への参加、放課後の補習授業の手伝い、授業参観研修、大学入試問題の解法解説などを行っている。

放課後の補習授業の手伝いでは、数学勉強会と同じように質問受けをしてもらうだけでなく、小テストの採点もしてもらっている。

質問受けでは、どのように対応をするのが適切であるかの指導を行っている。答えを導いてあげるだけでなく、答えを導けるような手順だけを示唆するような類題を作って解法を示す方がよいなどと指導している。生徒は答えまで示してあげるとわかった気になって、実は自分では解けるようにはなっていないことがあるからである。

小テストの採点では、丸付けに徹するのではなく、どのような誤答が多いかに気づくように指導している。共通する誤答については、生徒がいなくなってから誤答分析を行う。これも、将来、教壇で教えるときに「ここでこういう間違えをする人が多い」ということを生徒に伝えることができるようになるためである。また、私が知っている「数学雑学」も披露している。生徒が数学に興味を持つように、教科書内容だけをやるのではなく、時には雑学を話せるために、学生時代から、生徒を飽きさせないための数学に関連した小話、豆知識といったネタを集めておくことも勧めている。

2. 実地研修生とその後

実地研修生の受け入れは5年前の2012年度からである。1年目(2012年度)は2名である。1名は東京都採用され、もう1人は私学に採用されてい

る。2年目はいなかったが、3年目(2014年度)は1名、とても熱心に参加をしており、放課後だけでなく、平常授業の見学にも頻繁に来ており、見学後は1時間のふりかえりを行った。現在は横浜市立の中学校で個別支援学級の担任をしているとのことである。4年目(2015年度)は5名が参加していた。この5名はとても熱心に参加し、放課後になると生徒たちは彼女らが来校するのを待つまでになった。また、放課後の生徒との対応が終わった後は、20時頃まで模擬授業や問題解法の講義に参加していた。4月から1名は日本大学第一中学・高等学校、1名は神奈川県の高校の教員、1名は神奈川県にある私立中学高等学校の非常勤講師として教壇に立つことになる。5年目(2016年度)は3名が参加した。あまり来校することができなかったが、今後も機会があれば支援していきたい。

IV 最後に

学校の教師であるため教科書内容はしっかり教えなければならない。進度予定、ノルマを達成しなければならないなど自由がきかないことは多い。しかし、限られた時間の中で、数学に興味をもってもらえる授業をしていくために、教材研究を重ね、本文で述べてきたような様々な話のネタを日々集めるようにしている。また、休むことなく元気に教壇に立ち続けられるように、健康面には十分注意をしている。そして、「小池先生に習ったから数学が好きになった」「小池先生に出会ったから数学の先生になりたいと思った」という生徒をこれからも1人でも多く現れるように生徒と接していきたい。さらに、「小池先生のような先生になりたい」という教師を育成していきたい。